足利學校舊藏『經籍訪古志』所載の『老子道德經』について

山口謠司

はじめに

筆者は、私學振興財団「特色ある教育研究の推進」計画に基づく助成金を得て（本學圖書館申請一九九八年より二〇〇二年）、大東文化大學圖書館所藏の古典籍の調査を行い、隨時WEB上にその成果を發表して來た。時間的な制約のため、いまだ目錄作成上最も重要な刊・印・修の別を明記し得ない文獻も相當數あるが、これらについては引き續き調査を行い、WEB上での訂正を施したいと考えている。

さて、本學に所藏される個人藏書には、麓保孝舊藏の清朝家刻本を主要な收藏とするコレクションや市川任三の江戸後期から昭和初期に至る漢詩文書籍の舊藏書など、各々特筆すべきものが多く保管されている。

その中、今回紹介しようとする『老子道德經』は、高島菊次郎（槐安）の舊藏にかかるものである。

高島菊次郎、明治八年福岡縣生、明治三十三年東京高等商業學校を卒業、大阪商船株式會社に入社後香港代理店に勤務、三井物産香港支店勤務を經て、廈門出張所長、臺北支店長代理、臺南出張所長、大連三井物産肥料部次長の後、王子製紙株式會社取締役、國策會社中支那親交株式會社總裁などの要職を歷任し製紙業界のみならず戰前戰後の日中關係

にも多大な功績を殘した。氏の中國書畫のコレクションは早くから內外に知られ高い評價を得ていたが、楷書前後出師表卷一卷 祝允明筆 正德九（一五一四）年、草書宋之問詩卷一卷 王寵筆嘉靖八（一五九二）年、楷書離騷經卷 一卷 文徵明筆 嘉靖三一（一五五二）年 草書唐詩長卷 一卷 豐坊筆嘉靖九（一五三〇）年、草書詩書卷一卷 王鐸筆 崇禎十五（一六四二）年、墨竹圖屏風 鄭燮筆 乾隆十八（一七五三）年等、現在計三百三十九點が東京國立博物館に寄贈されている。著書に、『高島菊次郎傳』（昭和三十七年）、『槐安居樂事』、『徐文長、石濤、趙之謙』（いづれも昭和三十九年、求龍堂）、『思い出すまま』（昭和四十二年）、句集『盲鬼』（昭和四十三年）[注一] また沒後に編まれたものに櫻井文彌編『槐安居春秋』（昭和四十五年、求龍堂）。

東京國立博物館の館長であり、本學教授であった杉村勇三氏との親交により、藏書は本學に寄贈されたと聞く。[注二]

さて、高島氏が中國の美術品蒐集に於いて力を發揮されたことは、上に述べたような收集品からも知られるが、氏の蒐集された書籍については、餘り知られていないように思われる。

本學に寄贈された書籍は、法帖類を除けば、その量はもとより少ない。しかし、珠玉の數點がここには收められている。

高島氏舊藏『老子道德經』の書誌を記そう。

『老子道德經』　河上公章句

天正六（一五七八）年寫（眞瑞）　T390　　大一冊

〔江戶後期〕補配（綴絲は近時補）淡褐色表紙（糎×糎）「元正六年足利學校鈔本老子道德經」と打付書。原表紙と思しき遊紙一葉を置き、「老子經口義發題／虞齋林希逸」、「老子經序／葛洪序見述義二」。本文卷首「老子道經上／河上公

章句」。淡墨界線九行、鼇頭に音義注竝びに「師云」、「述（義）云」等書き入れ。全巻に亘って〔江戸末期〕薄葉を用いて裏打ちを施す。巻末に「于旹天正六戊寅季孟夏下旬寫之關東下野州足利之內學校下　眞瑞」と。本文及び注には、本文と同筆の返點、送假名、また別筆〔江戸初期〕異本考異注竝びに義注、『老子述義』の引用が見える。(注三)〔江戸初期〕朱引、朱點あり。裏打ち博葉と同じ遊紙に「東京神田巖松堂」のシールを添付。裏表紙に「抱關山人」と「永」の字の落書きあり。

表紙及び巻尾に「小島山房圖書記」、巻頭に「森氏」及び「高島藏書」、巻尾に「尙質之印」及び「字學古」の朱印あり。『經籍訪古志』巻五に所載「老子道德經二巻　舊鈔本　寶素堂藏」本は、まさにこれである。(注四)藏書印よりすれば、江戸醫官、小島尙質寶素堂（一七九二―一八四八）の舊藏が森立之へ移り、後、巖松堂を經て高島氏の所藏となったことが知られるが、川瀨一馬『足利學校の研究』(注五)には、「本書は、福山藩校問津館に歸し、又、森立之・大槻文庫に傳存し、『假名遣及假名字體沿革史料』にも所收されているが、現存未詳である。」と。(注六)

筆者眞瑞につき、川瀨氏は『經籍訪古志』所載眞瑞の識語を引き「卽ち、眞瑞は九華の受講の一人である」(注七)とされるが、今のところ筆者は、これを裏付けするための資料を知らない。

本書は、長澤・川瀨兩博士がそれぞれ『經籍訪古志』や足利學校所藏本の現存調査を行われて來たにも拘わらず、發見され得なかった所在を確認することが出來る重要な書籍である。しかし、それと同時に我が國に『老子』の受容を考える上でも非常に興味深い特徵を持つ。それは、上に示した如く本書に『老子述義』の引用が見えることである。

『老子』は室町時代禪僧の間で廣く讀まれた書物であった。(注八)足利學校の校規一にも「三註・四書・六經・列・莊・老・文選外、於學校、不可講之段。」(注九)と記されるが、『老子』を讀むのに述義を參照するのは、鎌倉時代、北條實時によって創建された金澤文庫、はた『日本國現在書目錄』に見える平安期まで溯る。

120788

老子姓李氏名耳字伯陽謚曰聃

爲周之國者聃人也作周爲藏室史當周幽王時

年三十嘗問禮於聃其言蓋見於禮記者雖

曰述而不作竊比於我老萊老來出書言道之所貴亦非過與也及夫子沒後百二十九年有

嘗見秦獻公言離合之數或曰儋即老子非

聃同音傳者記云周室既衰老子西遊莫往

終書知爲異人強以著書乃著上下篇

天之道利而不害聖人之道為而不爭

老子經之下終

于時天正六戊寅年孟夏下旬写之　関東下野州足利之内　校下　真瑞

中國で『舊唐書』藝文志に著錄される賈大隱『老子述義十卷』は、『宋史』藝文志を始めとする宋代以降の目錄には見えない逸書である。

我が國に於いては『日本國現在書目錄』に著錄があり、具平親王の『弘決外典抄』、『華嚴演義鈔纂釋』、金澤文庫藏『華嚴經隨疏演義鈔（〔周易注疏其他雜抄〕（假題））』(注十)、覺明『三敎指歸註』、『淨土三部經音義集』、度會行忠『大元神一祕書』、度會家行『類聚神祇本源』に引用が見えることが報告されている。(注十一)

足利學校の創設が或いは金澤文庫の本を納めたのではないかとも言われていることすれば、『述義』の引用が室町期の寫に係る本書に見えることは、鎌倉鈔本『弘決外典抄』、竝びに『華嚴經隨疏演義鈔（〔周易注疏其他雜抄〕（假題））』の所藏が金澤文庫にあることと無關係ではあるまい。

注

(1) 『盲鬼』、『思い出すまま』は、いづれも未見。『槐安居春秋』卷末の年譜による。

(2) 高島氏の著作『槐安居樂事』は、氏の蒐集による宋・元・明・清の繪畫 法書・法帖・碑拓を編んだもので、杉村勇造氏による解說がなされている。また『八十路—杉村勇造遺稿集』には高島氏について書かれた文章が收められている。（杉村棟氏編、昭和五十五年）

(3) 逸文については、深野孝治「賈大隱『老子述義』について—附『老子述義』輯佚稿」（『大正大學大學院研究論集 第十四號 平成二年』）がある。

(4) 『經籍訪古志』（『解題叢書』大正五年、國書刊行會 所收）。

長澤規矩也博士「『經籍訪古志』考」（『圖書館雜誌』第二十九號第十一號、昭和十年十一月發行、後『長澤規矩也著作集第二卷 昭和五十七年、汲古書院』）の「一五、現藏者表」は空格とする。『槐安居春秋』卷末の年譜によれば、大正十四年（高島氏五十一歲）に「このころ老子、莊子を中心として大いに漢籍を研究。」と。或いは、當時高島氏が本書を購求せしも、長澤博士がこのことを知らなかったか、或いは、高島氏が長澤博士の執筆以降に本書を購求せしか、不明。また、川瀨一馬『足

利學校の研究』は昭和十九年に發行されているが、これにも小島寶素堂舊藏の本書に觸れて、「『經籍訪古志』所載、今佚す」と。

(5) 川瀬一馬『(新訂增補) 足利學校の研究』(株式會社講談社、昭和四十九年刊)、五六頁參照。

(6) 大矢透編『假名遣及假名字體沿革史料』が國定教科書共同販賣所から發行されたのは明治四十二年である。大槻文彦博士の藏書が昭和三年博士の沒後、昭和十年前後から書肆文行堂を通じて分散したことについては、反町茂雄『一古書肆の思い出3』(一九八八年三月、平凡社) 七七頁に記されている。尙、ここで觸れられている『富士の人穴』(慶長十二年古寫本柳亭種彦舊藏識語) にも、森立之と大槻文彦の藏書印が捺してあったと。本書には大槻の藏書印がない。

(7) 川瀬一馬『(新訂增補) 足利學校の研究』(株式會社講談社、昭和四十九年刊)、一二二頁參照。

(8) 『老子』は抄物に多く引用されている。また、現存する『老子道德經』の〔室町〕寫本については、阿部隆一博士「本邦現存漢籍古寫本類所在略目錄」(『阿部隆一遺稿集』第一卷宋元版篇 (平成五年、汲古書院) に、天文十五年寫本 (斯道文庫二本)、武田杏雨書屋、東洋文庫、武內義雄藏 (二本)、大東急記念文庫 (二本)、足利學校 (二本)、陽明文庫 (二本)、龍門文庫、天正六年寫本 (斯道文庫) が、著錄されている。

(9) 市川本太郎『日本儒教史』(平成四年九月、汲古書院) 四八二頁。また足利學校校規は『古事類苑』(文學部二、昭和五十八年、第五版 (縮刷普及版) 吉川弘文館) 卷二十九 (一一〇七頁) に榊原家所藏文書を引いて掲載がある。

(10) 阿部隆一「金沢文庫藏鎌倉鈔本周易注疏其他雜抄と老子述義の佚文」『阿部隆一遺稿集』第二卷、解題篇一 一九八五年 汲古書院)

(11) 前掲、深野孝治「賈大隱『老子述義』について—附『老子述義』輯佚稿」參照。尙、本書に見える老子述義の佚文については稿を改めて記したい。

本稿は、平成十五年度、文部科学省特定地域研究 (二) の研究成果の一部である。